

第五章 自然環境の保護

第一節 開発事業等による動植物への影響

私たちの郷土、犀川町には、緑ゆたかな蔵持山^{くらもちやま}、飯岳^{いひだけ}（大坂山）、馬ヶ嶽^{うまがたけ}（岳）そして英彦山連峰よりつづく野峠、伊良原地区の山地など優れた自然に恵まれている。

また英彦山に源を発する今川や祓川の清流が町をうるおし、犀川の平野には、ため池や寺社をかこむ森が点在し、独特な自然を形成している。

しかし近年、本町でも少しずつ工業化が進むにつれて、宅地の造成、水面の埋め立てなどにより、自然の改変が進み、郷土の美しい自然が一つずつ失われようとしている。

それにより、本町の動植物も少しずつ影響を受けるようになってきている。

郷土の自然は、先人が私たちに残してくれたかけがえのない宝である。町民と行政が一体となって、これらの保全に努めるとともに町民一人ひとりの郷土を愛する意識こそ、これらを残していくかけがえのない力だと思ふ。

第二節 保護管理を要する動植物

一 個人所有のもの

唐 椿 品種名 キャブテン・ロー（ツバキ科）

ツバキは、日本の特産種で、中国には自生はない。

一方、トウツバキの原産地は、ビルマとの国境に近い、中国雲南省のサルウィン川の流域である。

日本には、江戸時代に伝来したらしく『花壇地錦抄』（一六九五年刊）に、その名が出ている。ヨーロッパには、一八二〇年、イギリス人リチャード・ロウがもたらした。

東インド会社の船長（キャブテン）であった彼が、妹（バィヤ夫人）の土産に、当時、ヨーロッパでもはやされていたツバキを持ち帰った。

その中に、トウツバキも含まれていたのである。

キャブテン・ローの名で、その品種は世界に広がったもので、兵庫県川西市の多田神社にある大樹も、同品種であるが、伝来されたのは、より古い（年代不明）。トウツバキは、その後欧米で改良されて、現在は他種との雑種を含めると、二五〇種もの品種が作出発表されている。

中国では、七〇種以上のトウツバキの品種があったが、一九五八年版の『雲南山茶花図誌』には、二一品種があげられているのみで、そのコレクションは雲南省の「昆明植物研究所」にある。

福岡県では、太宰府市北谷の田村政嗣氏宅と豊津町戸川氏（旧亀田氏）